【論文】

環境倫理に根差す環境意識・行動のエスカレーション
農・食・地域社会観にみる説得ゲーミング

木　谷　忍[*]　・柴　山　直[**]

目　　　次

１．はじめに
２．環境思想と農の倫理
　1）西洋を中心とした環境思想
　2）多様な環境思想
　3）農業の倫理
３．２つの正義（個人主義と全体主義）
４．救命艇倫理と宇宙船倫理
５．プレゼンテーション・ゲーミング実験
６．ゲーミング実験の実施と結果
　1）実験実施の概要
　2）実験結果―ポイントによる評価点
　3）実験結果－相手グループの考え方についての感想
７．結論

1．はじめに

環境問題の深刻化に伴い，市民の環境意識・行動が高まりを見せているが，この意識や行動の高まりには偏りがあり，それが過剰なケースもあるのではないかと筆者らは感じている．自然環境・生態環境だけに注目し，環境保全や生態系保護を最優先に掲げ，全体主義的な環境政策がエスカレートする，そして環境ファシズムと呼ばれるような過激なものへと発展してしまう危険性はないのであろうか．本論文では，このような環境や社会に対する全体主義的な考え方がエスカレートしてしまう危険性を実験的に明らかにし，環境倫理にもとづく啓蒙活動だけでは，環境意識・行動が人間主義に沿った自然なものになり難いことを確認することを目的とする．

方法的には，プレゼンテーション・ゲーミングと呼ばれる装置を設計し実験を行う．この実験では，２つの異なる考えを持つグループを設定し，両グループの間で，互いに相手グループを自グループの考え方に導くために，プレゼンテーションおよび討論を行い，その過程での各プレイヤーの意識や考え方の変化を追跡調査する．この２つのグループは，環境倫理の観点から，環境や社会に対して理想とされる考え方（「宇宙船倫理」という個人主義的な倫理）と，環境に対する全体主義的な考え方（「救命艇倫理」という全体主義的な倫理）をそれぞれ想定している．

２．環境思想と農の倫理

1）西洋を中心とした環境思想

西洋における環境思想を巡っては，まず，Ｐ.シンガーで代表される「自然の権利」に端を

---

*東北大学大学院農学研究科准教授
**アサヒビール㈱

発するディープエコロジーと，人間中心主義を標榜するソーシャルエコロジー（M.ブクチンら）の対立がある[註1]．もともとこれらの倫理は，自然環境は神が人間に与え，その利用は人間自身に委ねられるという価値観が西洋思想の基底にあり，それが自然に対する配慮を欠いた結果，その帰結に対する強い批判から生まれた．ソーシャルエコロジーはディープエコロジーについて，それが自然や動物が人間と同等の権利をもつことを含意し，社会や理性を放棄し自然崇拝を促してしまう危険（環境ファシズム）から批判し，さらに人間は悪であるという主張にも強く異議を唱える．逆にディープエコロジーはソーシャルエコロジーについて，その人間社会の目的が物質的・経済的充足のみにおかれ，西欧社会の伝統的な正義思想，自由で自己を実現することを批判する．しかしながら，現在では後者の人間中心主義が主流であり，これは近代西洋思想での正議論と親和的な関係になっている．

2）多様な環境思想

上の思想とは別に，デュボンヌの主張から始まるエコフェミニズムがある．これは自然環境の破壊と女性の抑圧との関連性を掲げ，自然と女性がもつ再生産性に着目した，自然への人間の「共感」という立場からの環境思想である．「共感力」という能力において，脳科学では女性は男性よりも優れているということは周知のことであるが，自然の権利や人間中心主義という抽象的で設計論的論理展開とは異質の思想は，後述する環境倫理にも影響していることは間違いない．

また，日本ではもともと「自然」に関して明確な概念は有しておらず，すべてモノとして捉えられてきた．人間も含めてモノとモノとの間の境界があいまいで，すべてが連続性をもった有機体イメージであった．現在の日本人は，西洋思想の浸透によって重層的な環境観を持っているが，このアニミズム的なモノを肯定し，それに共感する能力を大切にする思想もエコフェミニズムと共通していると考えてよい．この「共感」する能力に関係が深い人間主義と，前述の人間中心主義とは異なり，人と人，人と自然との間の共感力にもとづいた正義観である．この正義観での個人と社会（全体）は，道徳性の発達に関するギリガンの倫理[註2]やエコフェミニズムと立場を共有し，アニミズム的な人（個人）が集まって，ローカルな社会（文化）を作っている．

3）農業の倫理

農業倫理に関して，まずトンプソンの著書を参考にすると，農業技術の革新がもたらす安全性と環境問題，自然の権利や世代間倫理との調整，貧困問題，食の安全を確保するための手続き，そして家族農業の価値などが論点におかれている（トンプソン［6］）．筆者らは，環境思想や環境倫理との対比において，食の安全や家族農業に注目しておきたい．なぜなら，上に掲げた最初の３つの論点は，西洋の中心的な環境思想であるソーシャルエコロジーに深く根づいたものであり，後者２つがいわゆる人と人，人と自然との関係性に着目しているからである．同様なことは，シュレーダー＝フレチェットが提起する工業的農業による大量生産の問題，家族農業保護の必要性，ミーファムの田舎農業に対するアグリ

ビジネスの影響など，農業の倫理においても人間論的な観点が含まれている（註3）.

註：1) 例えば，小原［5］を参照.
2）C.ギリガンは，L.コールバーグの道徳性の発達の捉え方について，他者への配慮という観点が抜けていると激しく反論する（L.コールバーグら［4]）.
3）農業の倫理に関する論点整理は，畠中［3]）を参照.

３．２つの正義（個人主義と全体主義）

最初に，個人主義と全体主義という考え方に誤解のないような説明を加えておく必要がある．この２つの主義について最も安直な線引きは，自由主義と社会主義という枠組みからこれらを理解しようとするものであるが，これは国家の政治システムが，個人と社会の関係性をどうみているかという点について，外部からの観測による説明原理に過ぎない．すなわち，主義の捉え方が，個人ではなく国家や政治家の目線にあり，またそれを外部の評論者（研究者）がそう見なしているだけのことである．ここではまず，国民個々が個人主義なのか全体主義なのかということと，国家が自由主義か社会主義かということとは，まったく別なものと考えておく必要がある.

第１表　個人主義と全体主義

正義論の構成	個人主義	全体主義
設計論的 (デカルト主義)	自由 （自由主義）	社会主義 (グローバリズム)
人間論的 （人間主義）	ケア （慈愛）	文化 （ローカリズム）

人間主義という観点から，個人主義と全体主義を捉えてみよう．一人の個人がもつ正義観は，国家（政治家）が抱くそれとは異なる．これは，L.コールバーグと C.ギリガンの道徳性の違いに似ている．すなわちギリガンは，ケア（慈愛）の倫理が人間の道徳性の確立において重要な要素になっているにもかかわらず，コールバーグは，個人と他者との関係において，近代西洋思想における正議論をベースに設計論的に道徳性の発達段階を論じた挙句，ギリガンのいう倫理観に達するのが最終段階であり，かつ少数の人間に限るとしている．このような設計論的な西欧思想では，個人主義とは一義的には自由主義であり，正義の獲得（道徳性の確立）の困難さから，常に全体主義（社会主義）との緊張が避けられない．一方，人間主義では，個人主義は他者へのケア（慈愛や仁）という人道であり，儒教など東洋思想にも近いものであって，ここでの全体（社会）は，人道から自由に創られる文化や慣習などに従うという，その内容が普遍性をもたないローカルな意味での社会主義と理解される（第１表).

４．救命艇倫理と宇宙船倫理

G.ハーディン［2］は，「フロンティア（辺境）を無限に拡大することによって永続的な人類の発展が可能になる」（フロンティア倫理）に代表される個人主義的な私利が環境破壊を伴い，そして私たち人間の破局を導くとして，人間の行為を環境の要求と調和させるた

めには厳格な法規制のみがそれを可能にすると考えた．ハーディンが例に挙げる「救命艇」はその収容人数が実質的に限られ，彼はとりうる行動の選択肢を 3 つ提示する．全員乗せるという選択，余剰収容分だけを乗せる，これ以上は誰も乗せないという選択肢であり，最後の選択肢がハーディンの解決策である．もし豊かな国が貧しい国に資源を与え，または寛大な移民政策をとった場合，この隠喩のように豊かな国はやがて災害に見舞われるであろうと主張する．それは，貧しい国は豊かな国よりも急速に人口が増大するという理由による．さらに，「共有地の悲劇」の観点からも彼はこの選択を正当なものだと主張する．自然環境はオープンアクセスであるために，この「共有地の悲劇」が起き，これを防ぐためには所有形態を共有地制から責任制へ変更するしか手立てはないと述べる．きちんと管理し，個人の共有地での自由な行動を取り払うために，法によって強制・制限することでこの悲劇を避けることができる．将来世代に，彼らが生存できる環境を残すためにも，現代を生きる我々は救命艇倫理を受け入れ，生存可能なレベルにまで乗員を強制的に減少させなければならないのである．ハーディンは「自由」と「平等」をともに尊重する「民主主義」，「自由主義」では，原理的にフロンティア倫理のもたらした破局の解決は不可能であり，また「社会主義」のような理想主義は実現しないことから，全世界の人口を管理する世界政府の必要性と途上国援助の打ち切りの必要性を主張した．

一方宇宙船倫理では，先に述べた救命艇倫理のような裕福な救命艇の乗員が貧乏な救命艇の乗員に対して優位性を持つことを認めない．人類と自然の本来的な福利は双方ともに深く結びついており，いずれか一方を優先させるということは不可能であると考える．この宇宙船倫理は，地球の有限性・閉鎖性・関係性を前提としており，人と相互関係で結びつく自然，そして同じ人間とバランスを取っていく必要があるとみなす共生の倫理である．宇宙船倫理では，地球を直径 8000 マイルの宇宙船と考える．この重要な内的維持システムがうまく働かない場合，乗員が生き残っていくことは非常に困難になる．宇宙船の比喩は，人と自然環境との関係について考えるために非常に便利な手段を提供するが，フラー［1］の言葉，「宇宙船地球号に関してはとりわけ重大なことがある．それは取扱説明書がついていないということだ.」からもわかるように，宇宙船地球号について完璧な理解は難しく，このモデルから生ずる精密な倫理上の原理を定式化は非常に困難ではあるが，この倫理モデルの一般的な倫理規範となるものはある．救命艇倫理の言うような全体主義的かつ強制的な制限，つまり貧困に苦しむ低開発国を「帳消し」にするような政策をとるのではなく，逆にこのような場合は援助して低開発国を助ける必要があると考えられるのではないか．それは，こうした事態を放置しておくと貧しい人々が暴動を起こすなどの政治的な危機につながる可能性があるからでもあるし，彼らが貧困状態になったのは裕福な国家のこういった国々への「海賊行為」が原因の一つであるからだとフラーは主張している．このように，宇宙船倫理においては大きな分配的正義を信じ，平等・友愛を重んじているといえる．宇宙船倫理では，個々の人間（特に先進国の人々）の価値観と習慣における根本的な変革が，環境問題解決に向けて結果的に非常に役立つものとなると考える．

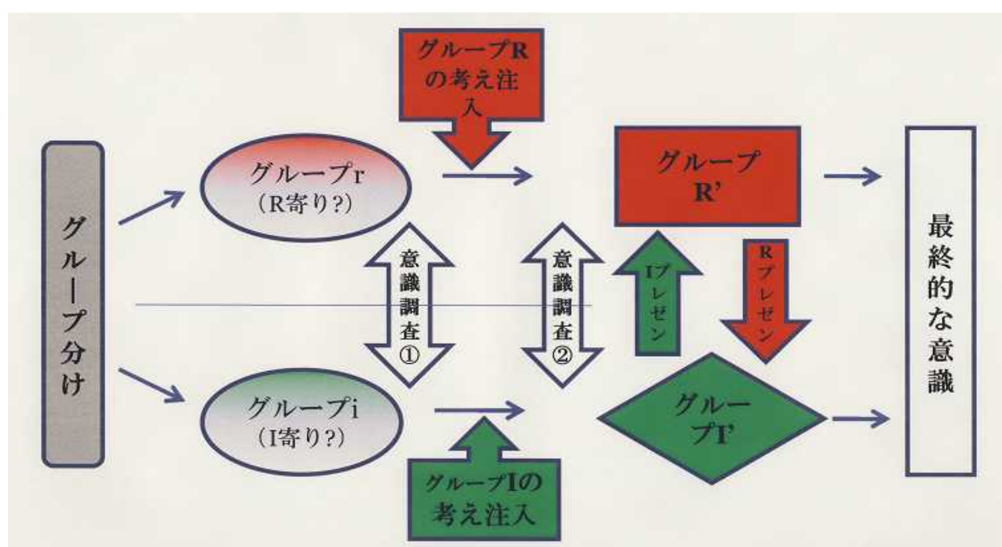
「救命艇倫理」は，人間社会が生き延びるためには個々の人間が犠牲になることはやむを得ないという意味では，人間中心主義のソーシャルエコロジーに沿っているようにもみえるが，この人間中心が指し示すものは個々の個人ではなく，人間の社会である．一方「宇宙船倫理」は，人と人との関係性を最優先し，社会全体としての判断は全員一致によるもので，それは必然的に個々人の手が届くローカルな社会にならざるを得ない．ここでは，人と人，さらに人と自然との間での「共感」が意思決定に大きく影響するという意味において，エコフェミニズムの思想と深く関係する．

５．プレゼンテーション・ゲーミング実験

現在の環境倫理では，宇宙船倫理に沿う環境政策・行動が理想的とされるが，現実には救命艇倫理に近い考えが支持される傾向があり，それがエスカレートしていく危険性を孕んでいるのではないかと筆者らは危惧する．ここで提案するプレゼンテーション・ゲーミングでは，こういった現象が起きやすいことを実験的に確認する．すなわち，この２つの環境倫理観に従うプレイヤー間でのやりとりが，彼らの環境意識にどのような影響を及ぼすかを分析する．

１）プレゼンテーション・ゲーミング実験の設計

このゲーミングではまず，宇宙船倫理に沿った思想をもつグループＩと，救命艇倫理に沿った思想をもつグループＲをおく．これらの思想について整理したものが表２である．ゲーミングに参加するプレイヤーは，「育った環境」および「環境・社会に対する意識」についてインタビューおよび質問紙調査から，グループＩに相応しい集団（グループｉ）と，グループＲに相応しい集団（グループｒ）に分ける．次に，各グループの考え方を強固にするために，ファシリテーターが各グループｉ，ｒに対して，相手のグループのプレイヤーの観察できないように，それぞれ宇宙船倫理および救命艇倫理に沿った環境倫理に関する説明を行う．



第１図 プレゼンテーション・ゲーミング実験のフロー

さらに一定期間を与えて，両グループに，自グループの考えを相手グループに説明するためのプレゼンテーションのデザインを作成させる．これによって，両グループともに自グループの考えについてより深く理解することが期待できる．この段階で，グループｉ，ｒをＩ，Ｒと名称変更する（思想が刷り込まれたという意味で）．

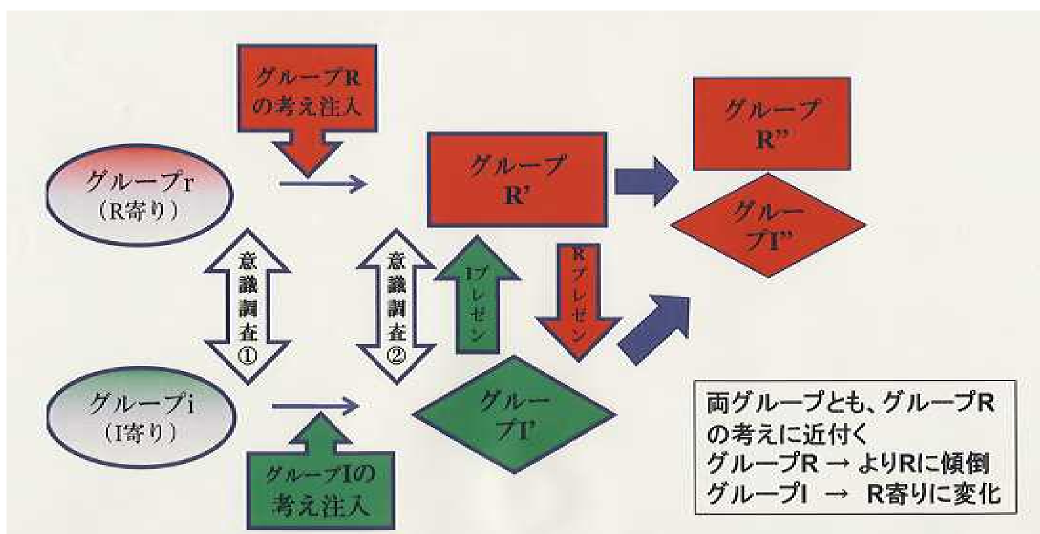
最後に，両グループでの先のプレゼンテーションおよび討論に入る．ここで初めてプレイヤー全員に，「相手グループを自グループの考え方に導くように説得する」という実験目的を明らかにし，相手グループが自分たちとは異なる環境倫理を背景としていることに気づく．両グループによるプレゼンテーションが終わったのちに，各グループの間で討論を開始する．この討論では，ファシリテーターからは議題の提示などはせずに，互いのグループに議論のコントロ―ルを任せる．グループ I の考え方と R の考え方をぶつけあうことにより，最終的にプレイヤーの環境意識がどのように変化するかを着目していく（第１図）．

2）実験の分析枠組みと仮説

プレゼンテーション・ゲーミング実験の各段階におけるプレイヤーの意識を確認するために，3 回の質問紙調査によって意識を確認・分析する．1 回目はゲーミング実験開始前に行い，2 回目は，ファシリテーターから各グループのプレイヤーへのプレゼンテーション後に，3 回目は実験の最後に行う．質問紙は，地球環境，食と農業，地域社会の３つの分野について，計 11 項目の質問で構成されている．各項目では，環境思想，農業の倫理，正義思想の観点から救命艇倫理と宇宙船倫理を捉えるとき，救命艇倫理，宇宙船倫理にそれぞれ親和的な考えｉ，考えｒの２つが示され，よりどちらの考えに近いかを問う．

このとき，救命艇倫理にもとづく全体主義的考え方が持つ影響力がこのゲーミング実験の過程で大きくなることを想定し，次の仮説を立てることにする．

仮説：プレイヤーの環境意識は，最終的にグループＲの考え方に偏っていく．



第２図　環境意識・行動の変化の仮説

ゲーミング実験は，東北大学農学部の環境経済学ゼミを受講した 6 名に参加してもらい，最初のグループ分けのための調査を 2008 年 12 月３日，ファシリテーターからの各グループへの説明を 10 日（グループごと別々に)、17 日にグループ相互でのプレゼンテーションおよび討論を実施した．

第２表には，ファシリテーターが２つのグループに刷り込もうとした考え方を示すものである．

第２表 ３つの分野において想定される各グループの考え方

	グループⅠ	グループＲ
地球環境	全体的な環境問題ではなく，日々の自発的な環境配慮行動を重要視する．	環境問題を重要視し，規制などによって環境行動をコントロールする．
食と農業	地域に根付いた自由な小規模農業．	効率的な生産の大規模農業．
地域社会	地域コミュニティを重要視し，平等・慈愛・地域社会との調和を重んじる．	資本主義的であり，経済活動を伴う開発によって地域社会を創る．

３回の意識調査は，11 項目ごとに２つの考え方が示され，よりどちらの考えに近いかを 4 段階で問う．回答欄には,「ｉ寄りである」「ややｉ寄りである」「ややｒ寄りである」「ｒ寄りである」という４つの選択肢を用意した．それらは以下のとおりである．

E．地球環境に関する項目(３つ)

①地球温暖化問題への危機意識について

E-1ｉ　地球温暖化問題について危機意識を感じない．

E-1ｒ　地球温暖化問題について危機意識を感じる．

②地球環境を守るための自動車使用についての意見

E-2ｉ　地球環境を守るため，自家用車を使用せずに自転車・徒歩で生活することは極力避けたい．

E-2ｒ　地球環境を守るため，自ら進んで自家用車を使用せずに自転車・徒歩で生活するのは仕方ない．

③地球規模の環境問題の解決についての意見

E-3ｉ　地球環境問題解決に向け，国民一人一人が日常の生活において身近な環境と向き合い取り組む．

E-3ｒ　地球環境問題解決に向け，各国政府がきちんと問題に向きあい，国全体で解決する政策を実行する．

A．農・食に関する項目(３つ)

①日本の食料自給率向上のための施策に対する意見

A-1ｉ　自由な小規模地域農業の奨励（小規模経営・家族経営・多品目経営の奨励)．

A-1ｒ　経営の大規模・効率化（大規模農家に対しての直接支払いなどの補助金制度)．

②食の安全の問題を解決についての意見

A-2ｉ　産直や生産者と消費者の意見交換会など，消費者と生産者の顔の見える関係作り．

A-2ｒ　トレーサビリティ・表示・基準などを法的にきちんと整備し，安全監視体制を強化する．

③食糧生産についての意見

A-3ｉ　地域の食糧消費はその地域に適したものを中心にまかなうようにすべき．

A-3ｒ　生産を特定の地域に集中した大規模農業による効率的な生産をすべき．

S．社会に関する項目(５つ)

①地域の活性化についての意見

S-1ｉ　地域住民間のコミュニケーションの関係といった地域内の交流．

S-1ｒ　他地域との情報交換や交流など地域間の交流．

②地域の伝統文化の保護についての意見

S-2ｉ　地域住民が地域文化・資源に気づき，地域づくりに自発的に取り組めるよう工夫する．

S-2ｒ　政府による補助金などで地域づくりを行うための制度を確立する．

③格差社会についての意見

S-3ｉ　平等の観点から格差はできるだけなるべく無い方が望ましい．

S-3ｒ　実力に応じた扱いの差は当然でありある程度格差社会は仕方ない．

④初等教育についての意見

S-4ｉ　自地域独自の文化・風習などの郷土教育．

S-4ｒ　国際化社会を意識して，早期から英語教育．

⑤“派遣切り”についての意見

S-5ｉ　労働は商品ではなく人の営みであるので，会社の存続のためでもよくない．

S-5ｒ　労働は資本主義社会では一つの商品であるから，会社の存続のためには多少仕方がない．

各グループの考えに近い回答であるかどうかを判断するための基準として，下記のようにポイント換算し，プレイヤーのポイントが高いほどより自グループに近い考えとみなす．

Ⅰ　自グループに近い場合　…　＋２

Ⅱ　どちらかといえば自グループに近い場合　…　＋１

Ⅲ　どちらかといえば相手グループに近い場合　…－１

Ⅳ　相手グループに近い場合　…　－２

次章では，以上の分析枠組みを用いて実験結果を分析し，仮説の検討を行う．

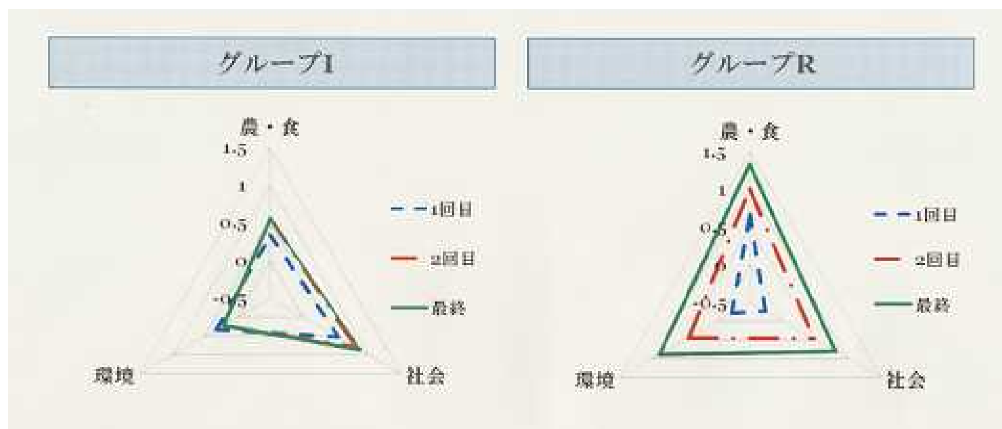
６．ゲーミング実験の実施と結果

1）実験実施の概要

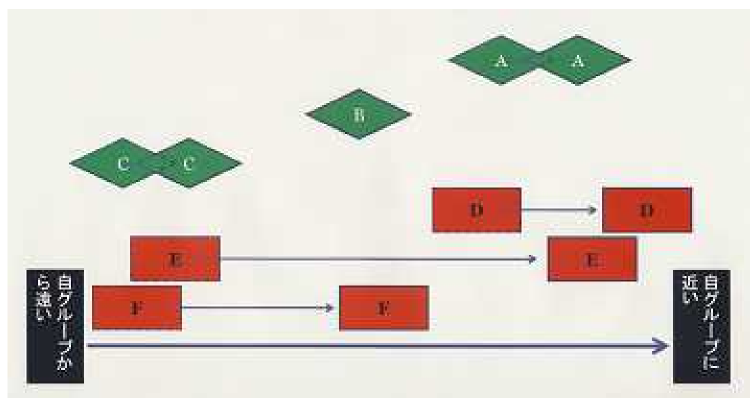
ゲーミング実験での６名のプレイヤーは，グループｉにA・B・Cの３名，グループｒにプレイヤーD・E・Fの３名が割り当てられた．グループ分けの際の調査では，ＡとＤの生育環境は特徴的であり，Ａは高校まで中山間農村育ち，Ｄは幼少から引越しを繰り返し，現在仙台市郊外の住宅地に居住している．Ｂ・ＦおよびＣ・Ｅの２名は比較的よく似ている．

2）実験結果―ポイントによる評価点

第３図は，３分野ごとの両グループの平均スコアの変化を示す．図から明らかなように，グループＩのプレイヤーはＩで想定される考え方に対する意識がほぼ変化しないのに対し，グループＲではＲにおける考え方に大きく意識が変化している．次に各プレイヤーに着目すると，第４図でみるように，グループ Ｒ のプレイヤーは，彼らの環境意識（全体主義・救命艇倫理）がさらに高まること，一方でグループＩでは意識の変化がほぼ見られない．



第３図　３分野ごとの２つのグループの意識変化



第４図 各プレイヤーの意識変化

特に，プレイヤーA と D については，D が R の意識がさらに高まるのに対して，Aの意識は微増に留まっている．

3）実験結果－相手グループの考え方についての感想

実験後の２つの環境倫理に対する見方を探るために，意識調査にもとづく客観的な評価とは別に，相手の考え方に対する感想を自由回答で聞いた．

＜グループ I＞
・現実的だが根本的解決にはなっていない，「科学万能」のようなものを感じた．（A）
・基準を厳しくすることで環境を守るというのは，それに対する反発がどうしても大きくなってしまうのではないか．そこに問題があるのではないか．（B）
・自分の考えはおそらく中間に近いので，相手グループの考えに共感するところもあった．発表・議論では互いに論理的におかしいところもあり歯がゆかった．（C）

＜グループ R＞
・懐古主義的で資本主義を否定していた．あやしいと感じた．具体的に見えにくかった．（D）
・あくまで理想論であって，達成は難しい．発表の内容に根拠がない．（E）
・現実感がない．理想論．「ゆるやかなる自殺．発表に一貫性・インパクトが無い．質問に対してはうまく逃げられた．（F）

以上のように，グループ I では全体的に相手グループへの疑問・反発がある一方で，相手の考えに対し共感もしている様子が見て取れた．グループ R では，一貫して全員から相手グループへの明らかな反発が見られた．グループ I の学生たちは，自分たちの倫理観を肯定しながらも相手グループを説得できなかったもどかしさが感じられる．一方，グループ R の学生たちは，自分たちの考えに自身を持っており，相手の考え方を見下している様子が伺える．

７．結　論

本稿では，環境に対する全体主義的な考え方が深く浸透していく傾向が認められ，筆者はここに環境ファシズムにつながりやすい可能性を読み取る．環境意識や環境行動の高まりが人間生活の質を脅かし，過剰なものになっていくのではなく，人間生活の中に自然に溶け込むものになっていくためにはなんらかの施策が必要なのではないか．この解決のために筆者らは，人と人との信頼関係・人と自然とのバランスのとれた地域コミュニティを作るという発想よりも，コミュニティを修す（なおす）という見方によって自然な環境意識が芽生えることを促したい．修す（なおす）ということは作る（つくる）ということよりもはるかに創造力を必要とするにもかかわらず，進歩主義社会では普遍性を追求する心性によりあまり評価されることない．

引用文献

［1］ Fuller,R.B.,*Operating manual for spaceship earth*,1963.
(芹沢高志訳『宇宙船地球号操縦マニュアル』筑摩書房,2000.）
［2］ Hardin, G., “The Tragedy of Commons”, *Science*, 162, 1243-1248, 1968.
(松井巻之助訳『地球に生きる倫理』佑学社, 247-263,1975.）
［3］ 畠中和生「生命圏倫理学の論点」,『生物科学』56(3), 135-144,2005.
［4］ Kohlberg, L., *et al* (1983), *Moral Stages*,1983.
(片瀬一男他『道徳性の発達段階』,新曜社,1992)
［5］ 小原秀雄監修『環境思想の多様な展開』,環境思想の系譜３,東海大学出版,1995)
［6］ Thompson,P.B.,*Agricultural Ethics*:*Research*,*Teaching*,*andPublic Policy*, Iowa State University Press, 1998